
雌猫は赤い月に歌う

蒼月まさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雌猫は赤い月に歌う

【Nコード】

N7622K

【作者名】

蒼月まさ

【あらすじ】

現代ホラーファンタジー。

吸血鬼 それは悪魔。

魔法を使い、

姿を自在に変え、

その肉体は不老。

そんな奴等にも弱点はある。

使った力を自力で回復できない。
その為には人間の血が必要だ。
それが吸血鬼たる由縁。

それ以外にも、沢山弱点はある。

太陽の光、

にんにく、

創造主の加護がある物。

だが、人間は恐れる。

それは何故か……力だ。

吸血鬼は力がある。

人間には無い力が。

だから吸血鬼を恐れ羨むのだ。

その吸血鬼にも恐れる者がある。

それは女王の力を持つ者。

第一章「接触」 1

1

ぎらつく太陽が、視界一面に映る白い砂を、照らし続けている。

それは宝石のように輝いて綺麗だが、車を運転してる者にとって邪魔でしかなかった。なぜなら、光が反射して目を細めないと、前が見れなくなるぐらい眩しいからだ。

そんな道なき道をドライブしている黒人の男性は、喉が渴いたのか車内の隅に付いているドリンクホルダーに手を伸ばす。そこにはペットボトルがあつて、男は気だるい感じで手にとる。ペットボトルに入っている液体は、普通の水だった。出発する時には冷えていた水も、今では温くなっていて喉を通る爽快感は、すでに無くなっていた。

3

「ふう〜。この暑さは異常だな。目的地に着く前に、茹で上がったやうよ」

ペットボトルを元の場所に戻すと、顎から滴り落ちてくる汗を、手の甲で拭う。

普通なら車にはエアコンが付いているので、こんなサウナ風呂みたいな事にはならない。だが、この車のエアコンの操作パネルには『故障中！ 使用禁止！』と言う張り紙が貼つてあった。丁寧に良く分からない動物のイラストが添えられている。

男はエアコンが壊れている車で、砂漠を横断する行為がどれだけ

無謀か、身に染みていた。

「ふにゆゝふにゆゝふにやゝ」

助手席の方から、奇妙な声が聞こえてくる。そこには女の子が寝ていた。

気持ち良さそうに寝息をたてている。その光景は微笑ましいように見えたが、よくもまあ、こんな蒸し風呂状態で寝れると、男は素直に感心してしまった。

と言うか、自分たちがオンボロ車で灼熱の砂漠をドライブする破目になったのは、隣で気持ちよく眠っている女の子が全ての原因なのだ。

何か原因だと言うと、出発の時間に女の子が寝坊して遅刻してきた。ただそれだけで、置いていかれてしまった。隊長のクラウスに笑顔でトラックの鍵を渡された。廃車間際と言え、普通に走れるし大勢乗れるように荷台は改造されていた。エアコンが壊れている以外は、文句は無かった。いや、そこが現在進行形で、文句を言うところだ。

改造されている荷台には、三人の男たちが汗だくになって座っている。ルームミラーで見る限り、そろそろ限界に近づいているのが分かる。

幌が掛けられているせいで、通気性は悪く、運転席に比べて温度が数度上になってるだろう。

それに運転席は、窓が開いているので風が入ってくる。それがあ

ると、無いのでは、かなり違ってくる。運転してよかったと、これほど思ったことは無かった。

「なあ、マークよ。俺と運転代わってくれよ。後ろは地獄だぜ」

唐突に呼ばれて、運転していた男　マークは、ドキツとした。

「運転つて……それ、本気で言ってるのか？　今までお前が、幾つ車をお釈迦にしたと思ってるんだ？　良くそんなことが言えるよ」

声をかけてきたのはマイケルだった。荷台から汗まみれの顔を突き出している。極度の暑さのせいなのか、その顔は疲れきった表情をしていた。

「釣れないこと言うなよ。高々、車を五台潰したぐらいでな……」

「ふにゃ～～ん」

マイケルが話している途中に、また奇妙な声が聞こえる。助手席の女の子が、唐突に寝返りを打つ。その時に、女の子の足がマークの足に当たる。まるで蹴りのように鋭かった。

声を出さなかったが、思わず顔をしかめるほどの激痛が襲ってくる。運が悪くすねに当たったようで、足をさすりたい衝動を抑えつつ、女の子の顔を見てしまった。

「おいおい、マーク！　前、前を見れよ！　危ないぞ！」

耳元でマイケルが喚いてくる。マークは前方を見る。

マークたちの乗るトラックは、目の前にある小高い砂丘に向かって、全速力で突っ走っていた。なんとか砂丘をよけようと、マークはハンドルを切った。

だが。

マークの行動も空しく、トラックは宙を飛んでいた。

一緒にマークたちの身体も、宙に浮く感覚に襲われる。実際、助手席で寝ていた女の子は、もろに宙を浮かんでいたのだ。まるで空中浮遊の手品のように。

「んー！」

轟音。そう言ってもいいぐらいの、痛そうな音がした。

「いったー！ーい！ ちょっと、人が寝てるんだから、安全運転しなさいよー！」

女の子は鬼のような形相で、こちらを睨んでくる。よほど、天井にぶつけた頭が痛いのだろうか、片手で頭をさすっている。切れ長の目には、涙が浮かんでいた。

その様子に、マークは思わず笑ってしまう。いつものことだが、面白い女の子だ。

「なんていうか、シートベルトをしないで寝てる、瑞樹ちゃんが悪いよ」

「仕方ないでしょ！ 壊れていたんだから。大体、シートベルト壊

したので、マイケルでしょ！ 壊したんなら、ちゃんと直しなさいよ！」

気の強そうな口調で、マークたちを避難してくる。これはいつものことなので、マークたちは話を半分も聞いていなかった。まとも聞いていたら、このわがままなお姫様 橘瑞樹の面倒なんか見てられない。

第一章「接触」2

2

助手席に座って、窓の外を見ながら、不機嫌な表情をしている。

何故不機嫌かと言うと、少し前の出来事に原因があった。そのことに、瑞樹は怒っていた。

座席の後ろから聞こえる笑い声。その中に、瑞樹を小馬鹿にする発言が聞こえてくる。どうせ、マイケルが悪口を言っているに違いない。暇があれば、瑞樹をからかっているのだ。それにマークも、余所見をして運転をするとか有り得ない。

元々目付きが悪いのに、眉間に皺を寄せて、何かを睨んでるかのような目付きをする。

8

「瑞樹ちゃん、そんな顔してないでよ。せつかくの可愛い顔が台無しだよ」

おずおずとしながら、マークは出来るだけ落ち着かせるように、言ってくる。

顔については、瑞樹自身も整ってると思ってるし、清楚な雰囲気を出している。特に自慢なのは、絹のように滑らかな黒髪だ。埃っぽいところに住みながら、ここまで維持するのは、とても大変なことだ。それにモデルのような身長に、スラリと伸びた手足。

そんな自分に自信を持っている瑞樹だが、一つだけ悩みがあった。

その悩みと言つのは。

「可愛い顔ねえ。たしかに、お嬢ちゃんは顔『だけ』は、可愛いよな。胸は残念だけど」

さつきからずっと、笑い転げていた男が、瑞樹に話しかけていた。

その口調は、完全に瑞樹を馬鹿にした感じだった。

「顔だけって、なによ！ 失礼なこと言わないでよ。それに……残念って、どういうこと？」

「残念は残念だろ？ 幾ら身長だけが、でかくなってもよ。胸がなあ。それじゃまるで、小学生だぜ？ と言うか、小学生以下だな」

マイケルの言葉に、瑞樹は茹でた蛸のように、真っ赤になっていく。瑞樹がコンプレックスに思っているのは、マイケルが言ったとおり、ぺったんこな胸のことだった。胸さえ気にしなければ、モデル並みのプロポーションなんだが、瑞樹にとって最重要課題は胸なのだ。

「まあまあ、瑞樹ちゃんは十六になったばかりだし、これから大きくなる『はず』だよ」

フォローのつもりだったんだろうが、それは瑞樹の逆鱗に触れるだけだった。

「どうせ、私は胸無しですよ！ まな板で悪かったですね！」

瑞樹はへそを曲げて見せたが、それを爆笑しながら、マイケルは見ていた。

……どいつもこいつも、私の胸を馬鹿にしまくりやがって！

「盛り上がっているところ悪いんですが、ちょっといいですか？」

マイケルの横から、二十代の男性が顔を見せていた。マイケルと同じ白人男性だ。

たしか、この男性は……ライアンって言ったっけ。最近、傭兵隊に入ってきた新人よ。

「別に良いけど、どうしたんだい？」

「あの、今回の任務の内容を聞いてなかったもので、いきなりトラックに押し込まれて」

「ああ、そうだったね。言つのを忘れてたよ。すまないね」

真新しい迷彩服を着込んで、それが初々しい。そんなことを思う瑞樹も、同じような格好をしている。年頃の女の子がする格好じゃないのは知っているが、意外と瑞樹は気に入っていた。

荷台にはもう一人いた。黙々と本を読んでいる。こっちはジョージ。ライアンと同じく新人だ。瑞樹はこの二人と仕事をするのは、初めてだった。

「今回の任務は施設の護衛だ。話によると、何者かに襲われると情

報を得たので、俺たちに守ってくれと言っことだ。情報の真意が取れば、大勢の仲間が来てくれるそうだ」

「情報が偽物なら、誰にも襲われないうて事ですね？」

「そうなるな。できれば、情報が偽りであつて欲しいものだよ」

マークが任務内容をかい摘まんで説明してくれた。さすが、副隊長だけある。ライアンも説明に納得したのか、すぐに指定の座席に戻った。

「でも、先発でお父さんたちが行ってるんでしょ？ そんなに戦力が必要なの？」

「そう言えば、そうだよな。先発隊を含めて、全員が出動なんて不自然だぜ」

瑞樹の質問に、マイケルも乗っかってくる。たしかに、引っ掛かるものがあつた。

その質問に考える仕草も見せないで、マークは即答で答える。

「新人の訓練を兼ねてのことだよ。瑞樹ちゃんも、再訓練させるつて言つてたしね」

なんか耳の痛いことを言われた気がしたが、瑞樹は軽く無視を決め込んだ。

今更だが、瑞樹たちのやってる仕事は、傭兵と言うものだ。依頼主から代金を貰い、戦争を行う。日頃から死と隣り合わせの仕事だ

った。瑞樹は幼い頃から、父親代わりの隊長クラウドと一緒に、戦場を駆け回ったりしていた。

「なんか……今回はいろんな意味で、きつい任務だな」

荷台の二人を見ながら、マイケルは呟く。新人教育をするのは、マイケルの役目なのだ。

……たしかに、キツイかな。

再訓練　瑞樹の訓練を見るのはクラウド。隊長自ら、手ほどきしてくれる。娘だからもあるが、瑞樹にとって良い迷惑だった。クラウドは殆ど化け物みたいな感じで、訓練の内容も他の隊員は誰一人ついて来れない。マークやマイケルでさえもだ。

それをほぼ毎日やらされて、一つクリアするとさらにキツイ課題が用意される。

知らない間に、瑞樹の強さは女の子とは思えないほどになっていった。元々、身体能力が高いのもあったのもあるが、それでも鬼の訓練についていけるのは、自分でも凄く思っていた。

最近、それから解放されていたのに、またやると思うと、凄く憂鬱だった。

落ち込んだ気分を何とかしようと、瑞樹はマークに話題を振ることにした。

「そつえば、マークのところの息子さんは、元気になっているの？」

唐突に息子の話を振られて、戸惑う表情をするマーク。

すぐにいつもの笑顔を瑞樹に見せて、話を始めてくれる。

「凄い元気だよ。瑞樹ちゃんには負けるけど、やんちゃで困ってるよ」

「なんか引つ掛かるけど、たしか、今年で十歳になるんだよね？」

「よく覚えていたね。来月で十歳になるんだよ。あ！ そうそう」

何かを思い出したかのように声を上げると、胸のポケットから何かを取り出して、瑞樹の顔の前に突き出してきた。見てみると、写真だと気づいた。

「これって、マークの家族？ 前に見たときは小さかったのに、大きくなったね」

写真にはマークと、マークの奥さん、それとマークの息子が写っていた。マークの息子は褐色の肌にチリチリの髪の毛、顔もなんだかマークに似てきている。特に優しそうな目元がそっくりだった。とても幸せそうな、家族の写真を見せてもらった。

「すぐに瑞樹ちゃんの身長なんか、抜いちやうよ。将来はサッカーの選手になるとか言って、毎日外でサッカーボールを蹴って遊んでるんだよ」

いつも優しい顔をしているが、子供の話をしている時が一番優しい顔をしている。マークは大事そうに、写真を胸のポケットに戻す。マークにとって、大事な宝物なんだろう。

「今回の任務が終わったなら、息子とサッカーを見に行く約束をするんだ」

「おいおい、また、マークの息子自慢かよ。そう言えば、俺にも息子がいるけど、お嬢ちゃんも見てみるか？ 今はちょっと小さいがな」

「え？ マイケルにも息子がいるの！ 初耳だけど……」

「ここにいるぜ。生まれてからずっと一緒の、息子がな」

「生まれてから、ずっと？ え？ え？ ……あ！」

マイケルの下品なジョークに気づくと、瑞樹は頬を朱色に染めていく。

そして、わなわたと右拳を握りしめると、瑞樹は振り向いた。マイケルの方へ。

「げ、げ、下品にや事を、言うにや……」

ばちん。

見事な右ストレートが、マイケルの顔面を捉える。プロの傭兵でもよけられない速度だったのか、的確に顔の中心を拳がめり込んでいた。

「いてええなあ！ うああー！ 鼻が……鼻が……曲がった！」

あらぬ方向に曲がった鼻を押さえて、マイケルは喚きまくっている。うるさくて仕方なかったが、それを瑞樹は満足そうに見ていた。いつもの、お返しと言わんばかりの顔で。

両方の鼻の穴から、おびただしい量の血を噴き出しながら、マイケルは何とか立ち上がる。

「なかなかのパンチだったが……俺には……効かないぜ……ぐふっ」

そう言っつて、荷台に大の字になって倒れる。マイケルだし大丈夫だから、瑞樹は無視をした。

「そつだ、言っつてない事があつたんだ。この先にあるガソリンスタンドで休憩するよ」

「やった！ レストランとかあつたら、食事がしたい！ お腹が減つたし！」

瑞樹は両手を上げて、喜ぶ。アイドルも顔負けな、可愛い笑顔を作っていた。

「また飯を食うのかよ。寝る前にも、大量に食つてたる？」

「そんなの、とっくに消化しちゃったよ！ 私はお腹が空いているのよー！」

そんな事を言っつている瑞樹の足元には、大量のお菓子の箱や袋が捨ててあるゴミ箱があつた。

「あま、たしかに休憩は俺も賛成だが、他にも用事があるんだろ？」

「そつだ、出発の時に隊長に言われてな。そこで、人を拾うことになっっている」

「人を？　なんだ、待ち合わせでもしてるのか？」

「ああ、誰かは聞いてないが、任務には必要な人らしいぞ。施設に大事なものがあって、それを手に入れるために行くらしいという話だ」

なんか胡散臭い話を始める。施設に大事なものがあって、それを手に入れる。泥棒の片棒を手伝わされるとか考えてたことを思わず、瑞樹は口に出していた。

「泥棒ねえ。たしかに俺らは金さえ貰えば大抵なんでもするが、さすがに泥棒はなあ」

マイケルは否定的なことを言う。確かにそつだ。瑞樹たちの傭兵隊は、ちゃんとした企業からの仕事しか引き受けない。と言うが、隊長のポリシーだそつだし。

「まあ、ガソリンスタンドに着けば、分かるよ。それまでガソリンが持てば良いが」

さらりと、マークが怖いことを言う。こんな砂漠の真ん中で、ガス欠になったら……。

「予備のガソリンとか無いの？　砂漠の真ん中で、干物になるのは嫌だよ」

「すでに胸が干物じゃねえかよ」

思わず殴りそうになるのをグツと我慢する。大人な自分を誉めてあげたい。

マイケルがうるさいので、話題を戻すことにした。
「施設にある大事な物って、なんだろうね？」

突然の瑞樹の言葉に、二人は黙ってしまふ。

何かを考えているようで、少しの間、静寂が車内を包む。その静寂を破るように、凄く真面目な顔をしたマイケルが、口を開き始めた。

「無修正ポルノとかじゃねえの？」

「じゃーーーーーん！」

トラックの中から、顔を引っ掻く音と、男の凄惨な悲鳴が聞こえてくるのであった。

第一章「接触」3

3

毎回繰り返されるコントのようなやりとりを見て、マークは笑っていた。

狭い荷台でのたうち回っているマイケルに、「にやーにやー」と喚きながら文句を言う瑞樹。

「ふ〜！ にやーにやーっ！」

昔から瑞樹は、極度に興奮したりすると、喋り方が猫みたいになる。

マイケルはそれを面白がって、よく興奮させて遊んでいる。本物の猫と同じく、瑞樹も手を出してくるが、これがプロボクサー顔負けのパンチ力。意外と命がけだったりするのだ。

実際にマイケルの顔は、青アザだらけになっている。

「おいおい、瑞樹ちゃん。落ち着いて、仕事する前にマイケルが、再起不能になるよ」

「にゅあ！ …… あ、マーク。失礼な、私は物凄く落ち着いているにやー！」

未だ興奮冷めやらずの感じで、瑞樹はマークに顔を見せる。毛を逆立てて怒る猫よろしく、瑞樹の長い髪の毛は乱れていた。マークは苦笑しながら、それを横目で見ている。

ルームミラーで荷台を見ると、マイケルが傷の手当てをしながらついていた。それにしても、見事に引っ搔かれたものだ。縦に横にと、マイケルの顔に傷が刻まれている。

ライアンは救急セットから、消毒薬やらを取り出して、マイケルの顔に塗りたくっていく。

当然、傷が染みたらしく、マイケルは呻く。まるで子供のように、手足をばたつかせながら。

「い、いてええええ！ もっと、優しくしろよ！ すぎえ、染みるだろ！」

「ち、ちょっと、マイケルさん。動かないで下さいよお」

手当てをしようとするが、マイケルが動いて出来ない。ライアンは、それを必死に押さえ込もうとしていた。側にジョージも居たが、無視をするように本を読み続けている。

「傭兵なんだから、そんな傷で騒がないでよ。うるさくて、堪らないわ！」

「だ、誰のせいだと思ってるんだよ！ これはお前が付けた傷だろうが！ お嬢ちゃんよ！」

元はと言うと、マイケルがからかったのが元凶な気がするが。マークは思わず突っ込もうかとしたが、これ以上長引かせるのが嫌だったので、スルーを決め込んだ。

やっと瑞樹は落ちて着いたようで、猫語を話さなくなった。相変わらず、マイケルは荷台の中を転がりながら、痛みを耐えていた。

仲が悪く見える二人だが、実際は凄く仲が良かったりする。

歳の離れた兄弟とも言うのか、なんだかんだマイケルは面倒見が良い。何かと瑞樹を気にしているが、恥ずかしいのだろう、照れ隠しにちよっかいを出してしまう。当の瑞樹は、それに気づかず本気で怒っている。とは言え、お互いが本当に信頼しているから、こんなにも罵り合えるのだろう。

マークの場合は、マイケルより歳が上だから、妹と言うよりは娘という心境だった。

隊長のクラスも含めて、瑞樹はこの傭兵隊全員のお姫様なのだ。「だいたいね、マイケルは下品すぎるのよ！ 新人訓練の時も、マラソンさせながら変な歌を歌わせてるし！ 年頃の女の子が居るんだから、もっと気をつけなさいよ！」

いや……前言撤回、女王様と訂正しよう。と、マークは心の中で思うのだった。

第一章「接触」4

4

砂漠の真ん中にあるオアシス。そう言ってもいい、場所だった。ガソリンスタンドとレストラン、小さなコンビニエンスストア。この三つが砂しかない場所にあることが、奇跡に近かった。と言っても、お客の姿は見えない。

居るのは、瑞樹たちの五人だけだった。ガソリンスタンドに車を停めても、誰も出てこないし本当に商売をする気があるのか、瑞樹は疑ってしまうほどだ。

「誰も居ないね。待ち合わせの人も、まだ来てないみたいだし」
瑞樹はコンビニの中を覗きながら言う。電気が消えていて、人の気配はない。ついでに、ドアには「クローズ」と書いた看板がぶら下がっている。よく見てみると、店の中には品物は一切無かった。店の状況から見て、休みじゃなく潰れているようだ。

ため息を吐きながら、コンビニから離れる瑞樹。

「待ち合わせの人が居ない以上に、店員も居ないのは不思議だな。とりあえず、ガソリンは入れさせてもらうかな」

そんなことを言いながら、マークは勝手にガソリンを入れ始めてしまう。

泥棒はいけない事だよと、瑞樹は思ったが、それよりレストランが気になっていた。

「おい、ジョージ、ライオン。お前たち二人で、周囲を見てきてくれ。何もなかったら、あのレストランに戻ってこいよ。何かあったら、俺がマークに無線を入れてくれ」

マイケルの言葉に、二人は頷き自動小銃を提げながら、建物の裏側に歩いていく。

「私もレストランに行く！ プリンを食べるんだ！」

「おいおい、涎が出てるぞ」

目を輝かせながら叫ぶ瑞樹を、マイケルは呆れた顔で見ている。そんなことを気にしないで、瑞樹は浮かれた足どりでレストランに向かつていく。

レストランの駐車場にも、車は一台も停まってなかった。店の窓も真っ暗で中は見えないし、やってないのかと思いつつも、ドアの前に立つ。瑞樹はそこに掛かっている看板を見て、安心する。看板には「オープン」と書かれていたからだ。

中に入ろうとしたが、瑞樹は何となく後ろを振り返る。マイケルはまだガソリンスタンドに居て、マークと何かを話している。瑞樹の場所からでは聞こえなかった。

暫く見ていると、ガソリンスタンドの建物から人が出てきた。ポロポロのつなぎを着た男性だった。思った以上に若いので、瑞樹は驚いてしまった。こんな、辺鄙な場所で働いているんだから、くたびれた老人をイメージしてたからだ。

マークと青年が話し出したので、そこでマイケルはやっとレストランに歩いてくる。

「マイケル、早く！ プリン、プリン、プリン！」

「うっさい。お前は子供か？ プリンじゃなく、飯を食え、飯を！」

「いいでしょ！ 私はプリンが大好きなの！ それにご飯もちやんと、食べますよーだ！」

うんざりした顔をするマイケルに、瑞樹は小さく舌を出して怒って見せる。それにマイケルは余計に、うんざりした顔を瑞樹に向ける。

瑞樹にとって、プリンは三度の飯より大好きな食べ物だ。プリンのためなら死ぬると、豪語するだけあって、プリンであれば何でも食べる。ただ、チョコプリンだけは邪道と言うことで、食すことは一切しない。瑞樹がチョコレートを嫌いなのもあった。

胸の高鳴りを抑えながら、瑞樹はレストランのドアを開けて中に入る。

目の前が真っ暗だった。明るいところから入ったから、余計に中が暗く感じる。

数秒でレストランの中の暗さに目が慣れてきた。それでも、十分に暗いのだが。

「あの、誰か居ませんか？ プリンが食べたいんですけど？」

店内に人の気配は無かった。と言うか、電気が点いていない。その代わりに、蝋燭がいたるところに置かれていて、その炎が店内を照らしている。

それでも十分とは言えない明るさだった。表の看板を見なければ、休みかとすら思うほど。

瑞樹はもう一度、店内を呼ぼうとしたとき。

「いらっしやいませ。出てくるのが遅れて、申し訳ありません」

と、声を掛けてくる人影が、瑞樹の前に突然に現れた。

それに瑞樹は、びくりと身体を飛び上がらせて、驚いてしまう。人影は少年だった。店員と言うには、少しばかり早い気もするぐらいの若さ。瑞樹よりも二つ三つは、年下のように見えた。

「お店はガラガラだから、好きなところに座って良いですよ。えっと、二人で良いのかな？」

「いや、すぐに一人が来るから、三人だ」

マイケルが少年に返事を返す。瑞樹は入り口側の、四人席に座った。こういう場所で席につくときには、できるだけ入り口側に座れと言われていたので、無意識にそこを選んでいた。

マイケルは瑞樹の目の前の席に座ると、メニューを広げて見始めていた。

「なんで、三人って言ったの？ 私たちは……」

マイケルは突然、瑞樹の口を手で塞ぐ。瑞樹に質問させないと、言わんばかりに。

「なんか、怪しいだろ？ 正直に言うのは、得策じゃないような気がしたんだ……それより、よく英語が分かったな。お嬢ちゃん、英

語は苦手だったろ？」

「ツーヤスリーぐらい分かるわよ！ 馬鹿にしないでよ！」

実際のところは、殆ど分かってなかったが、入り口で数を確認するのは人数だと瑞樹は考えたのだ。まぐれで、それが当たっただけ。「少しは英語を覚えろよ。イタリア語でも教えてやるうか？」

「英語も覚える気がないのに、イタリア語なんか出来るわけ無いでしょ？ てか、マイケルはイタリア語が話せるの？ 初耳だよ」

「昔、そこら辺に住んでたんだよ。それで話せるようになったんだ」とくに興味がなかったので、瑞樹は適当に相づちを打っていく。

そんなことをしていると、レストランのドアが開く音がする。マークが入ってきたのだ。

「マーク、こつちよ。暗いから、足元に気を付けてね」

瑞樹の声に気づいたのか、マークは瑞樹たちが座っている席に近づいてくる。

マイケルの横に座ると、店内を見渡してマークは一言。

「このレストランはやってるのか？ 電気が点いてないけどさ」

その言葉に、瑞樹は思わず笑ってしまう。ついさっき瑞樹も同じことを考えたし、誰が見てもこれだけ暗ければ休みだと思うのが、自然だろう。

「これだけ薄暗いと、メニューを見るのも一苦労だよ。暗視スコップでも、持ってくれば良かったかな。メニューも薄汚れていて、見えないよ」

珍しく愚痴っぽいマーク。瑞樹は珍しいものを見るように、まじまじと見る。

顔につきそうなくらいに、メニューを目の前に持ってきて、マークは眉間に皺を寄せる。

そこで、瑞樹はあることを思い出した。そう、マークは。 。
「目が悪いんだっけ？ 黒人だと、目が良いイメージがあるけど、偏見なようだね」

「偏見も何も、仕事のせいで視力を悪くしたんだよ。もともとは、

視力は良かったんだよ」

見るのに疲れたのか、マークは早々とメニューを脇に退かす。

「それにしても、ガソリンスタンドに人が居たんだね。結構良かったけど」

「そうなんだよ。服装はボロボロでも、小綺麗な感じの青年だったね。その割りには目付きが鋭くて、中々の身体つきをしてたよ。従軍経験があるみたいだね」

「で、何の話をしていたの？」

奥に消えた少年が姿を現すまで、暇潰しに瑞樹は青年との話を尋ねることにした。

マイケルは黙って、店員を呼ぶボタンを連打している。

「そんな重要な話はしてないよ。俺たちの前に誰か来てないかって聞いただけだよ」

「それで、なんか答えたの、その人は？」

「いや、ここ数日は誰も来てないって、言ってたよ」

マークの答えに、マイケルはかすかに眉毛を上げる。それ以外は変わらず、ボタンを押している。その顔は、何かを言いたげな様子だった。

マイケルの顔に気づいていたが、瑞樹の頭半分以上はプリンで埋まっていた。暇潰しのマークの話もすぐに終わったのもあるが、早く注文に来いと、瑞樹はそわそわしていた。

マークがボタンを押すのに飽きてきた頃に、奥から少年がやってくる。

「申し訳ありません。そのボタンは壊れてまして、さっそく注文を聞きます。まずはお嬢さんから、何かお決まりのご注文はありますか？」

キョトンとした視線を、前方のマイケルに向ける瑞樹。それを見てマイケルは、面倒くさそうに「お前だよ」と瑞樹に教える。

「わ、私？ えっと、あの、私、英語分らないから、日本語でお願いしていい？」

それを聞いて、少年は思わず笑ってしまふ。しどろもどろの瑞樹が面白かったんだろうか。

「おいおい、お嬢ちゃんよ。それは無いだろうよ……」

「いえいえ、良いんですよ。それに僕は日本語は得意なんで、構いませんよ。で、ご注文はとうしますか？ 髪の毛の綺麗なお嬢さん」

流暢な日本語を話す少年。下手すると、瑞樹より日本語が上手かったりする。

「あ、ありがとう……とりあえず、プリンを特盛カラメルだくだくだで」

「おいおい、何だその注文はよ！ ここは牛丼屋か？」

「良いでしょ！ 今はこの注文が流行ってるのよ！ 私の中でね」
瑞樹の理不尽な注文に、少年は何も言わずにメモをとる。続いてマークに注文を聞き始める。

「……そんな、注文が通じるのかよ……わからねえな、世の中つてよ」

第一章「接触」5

5

少年がマイケルたちの注文を聞いて奥に戻ってから、すでに十数分が経っていた。

目の前に座っている瑞樹は、痺れを切らしているのか、落ち着きがない。

自分の長い黒髪を弄りながら、ぶつぶつ言っている。何を言っているのかマイケルは気になったが、どうせロクなことでもないと思い、見て見ないふりに徹した。

「せんなに難しい注文をしてないのに、来るのが遅いね」

「ああん？ あの少年が、厨房で一人でやってるんだろっよ」

「なら、マイケルが行って手伝えば？ 料理は意外と上手いでしょ」
嫌な笑顔を浮かべて、瑞樹は言ってくる。それをマイケルは、片目を瞑って無視をする。

それが面白くないのか、瑞樹の顔が見る見ると変わっていく。感情が豊かな奴だ。

「聞ってる？ 一人で可哀想だから、マイケルが手伝ってきてよ」

「俺はお客様だ。なんでお金を払って、手伝わなきゃいけねえんだよ」

「何でって……私がプリンを早く食べたいからだよ！ 凄く重要なことですよ？」

……やっぱり、プリンかよ。本当にプリン狂な、お嬢ちゃんだな。テーブルに突っ伏すマイケルを、瑞樹はなぜか胸を張って見下ろしている。

マイケルの隣に座っているマークは、いつものようにニコニコして見物だけしている。たしかに、端から瑞樹を見ている限りでは楽しいが、巻き込まれるほうになると「面倒臭い」の一言に尽きる。

とは言え、これ程からかつて面白い奴も居ないのも、たしかだが。ふと、マイケルは顔を上げる。銀のトレーを持って、近づいてくる影が見えた。

レストランの店員らしき少年だ。トレーを片手に、営業用の笑顔を浮かべる様子になっていった。だけど、マイケルには何かがつ掛かる感じがあつた。それが、何か分からない。

「お待たせしました。何せ一人なので、時間が掛かってしまいました」

そう言いながら、少年はトレーの上の物をテーブルに置いていく。マークの前にはハンバーガーとコーヒー。マイケルの前には、ビールが入ったジョッキ。そして瑞樹の前には、プリンが置かれていた。何て言うか、デカイ。

「わあお！ 特盛のプリンだよ。カラメルの量も最高！ 何て言っても、生クリームがどっさりと乗っかってるのは、ポイントが高いわよ」

よくわからない褒め言葉を並べる瑞樹。その顔は、すこぶる最高な表情をしていた。それほど、プリンが食べたかったようだ。すでに涎で、口の周りがてかてかと光っている。

「そんなに喜んでいただけると、本当に嬉しいですよ。では、僕はこれで戻ります。では、お早めに、お食べください」

少年は一礼すると、足早に厨房に戻っていく。マイケルはそれを横目で、見送っていた。

「うまー！ プリン、うまーだよ！」

早くもスプーンを握りしめながら、瑞樹は次々と口に放り込んでいく。その食べ方は、女の子とは思えない程、酷いものだった。せめて、ゆっくり味わって食べる。

元気よく食べていく瑞樹を見ながら、マイケルはジョッキに口をつける。ギンギンに冷えたビールが喉を通っていく。まさに生き返る美味しさ。

「く〜。この一杯の為に、俺は生きてるんだなあ」

「くう」。このいっぱいプリンの為に、私は生きてるんだなあ」
スプーンをくわえながら、瑞樹は言う。マイケルの真似をするが、少しニュアンスが違う。

ハンバーガーを口にしながら、マークはクスクスと笑っている。
「本当に二人は中が良いよね。羨ましいよ」

仲が良いと言うか、昔から瑞樹はマイケルの真似をよくする。粗暴な感じがするのは、そのせいなんだろう。マイケルはもう少し、おしとやかになって欲しいと思っているが。

マイケルはテーブルの上に、視線を落とす。大きな皿に、山盛りのプリン。すでに半分は食べられているが、それでも普通のプリンの三つ分は残っていた。どんだけだよ。

未だ山盛りのプリンを平らげていく瑞樹をつまみに、マイケルはビールをあおる。

その時、異変が起こった。外から聞きなれた音がしてきたのだ。銃声だった。それも一つや二つじゃない。最低でも四人が銃を撃っている。

すぐさま、銃声は瑞樹たちのいる店内に侵入してきた。窓や壁を壊しながら。

「お嬢ちゃん、頭を下げろ！ 危ないぞ！」

「くそ、ジョージ、ライアン！ マークだ、応答しろ！」

「ぶ、プリンー！ わ、私のプリンがああああ！」

三人はそれぞれ叫びながら、テーブルの下に潜り込む。今まで居たところは、鉛の弾が大量に撃ち込まれていた。数秒遅れていたら、マイケルたちは蜂の巣にされていただろう。

それにしても誰が狙ってきたのか、マイケルは何となく目星はついていた。

「まだ、半分残っていたのに、プリンを返してえええ」

銃弾のせい、テーブルの下に潜った時に落ちたのか、プリンが乗っていた皿は無惨にも地面で割れていた。その周りにプリンがぐちゃぐちゃになっている。

瑞樹は地面を見て、本気で泣いていた。大粒の涙を流して、顔を濡らす。

悲しいのは分かるが、泣くほどでもない。とマイケルは思ったが、口にはしなかった。

何でかと言うと、今の瑞樹は、ちよつとした爆弾状態だからだ。すでに導火線に火は点いた。

「あい、お嬢ちゃんよ。早まった行動はするなよ。せめて、敵の数がわかるまでは」

「プリンの仇、奴らの命で償わせてやる！」

すでに爆発していたようだ。瑞樹は完全に暴走状態になってしまった。

隣で、外に連絡を取っているマークを見る。すでに終わったように、マイケルと同じような顔を瑞樹に向けていた。止めるのは無理なのは、お互いにわかっていたので。

だったら、尻拭いを二人ですりしかない。どうせ今のままと同じり貧だったから、瑞樹が突っ込むことで、状況を打開できる方に賭けることにした。

「おい、マーク。俺が援護をするから、お前がお嬢ちゃんをカバーしてくれ」

「わかったよ。本当にうちのお姫様は、好き勝手をやってくれるよ」
「それが、良い所でもあるがな」

すでに入り口に走っていく瑞樹を追って、マークは後を追っていく。

マイケルは、腰から拳銃を取り出して、弾倉を確認する。そして、一呼吸をついた。

二人がレストランから飛び出したので、敵の攻撃がそちらに向かう。

お陰でマイケルが頭を出しても、気づかれることは無かった。意

外と、間抜けだな。

外を見ると、黒ずくめの戦闘服を来た兵士が四人。いや、もう一人ボロボロのつなぎを着た男が、自動小銃を持っている。ガソリンスタンドの店員だった青年だ。

思った通り、全てが畏だったんだ。もう少し早く気づけば、もっと良い手が打てたのに。

今更遅いと分かっているが、マークがレストランに来た時に言っていた青年の言葉に、マイケルは違和感を感じていたのだ。

あの時の直感で動いていれば、後手に回った自分に、自己嫌悪を感じる。それを振り払うように、マイケルは銃を構えた。

背後にも意識を置いておく。あの少年も外の奴らの仲間の可能性があるからだ。

早々と外に躍り出ていく瑞樹が、敵兵士と衝突を始める。相手は五人の中ではメタボ体型で、動きが遅い。そこを瑞樹に狙われたようだ。頭に血が上っていても、冷静に考えている。

その後ろを、威嚇射撃しながらマークがついて来ている。他の四人の敵兵士が物陰に隠れて、攻撃の勢いが弱まっていく。

その間にも瑞樹は、メタボに向かってパンチャキックを浴びさせていく。まさに一方的な攻撃だった。おもわずマイケルは心の中で、十字を切る。安らかに眠れ。

マイケルもただ見ているだけではなく、ちゃんと仕事はしていた。相手が物陰から出てこれない様に、狙い撃っている。マークとマイケルの射撃で、敵は頭を出すことができない。

本当なら頭を狙って撃ち抜くことも可能だが、お姫様がそれを許さない。出来るだけ、両方の死者を出さないようにと、言われているからだ。マイケルたちは傭兵だから、瑞樹の言うことを聞く必要が無い訳だが、トラウマを知っているだけに甘くなってしまう。

だから、相手の動きを封じるのがマイケルとマークの役目だった。敵を無力化するのは瑞樹の役目。彼女の身体能力の高さが、相手を殺さずに戦闘不能にすることが出来ていた。ただ、命を奪わない

だけで、相手の負傷度合いは度外視されている。

中には死んだ方がましな奴も居たと、マイケルは記憶している。

メタボを伸した後、瑞樹は次の標的に向かう。背がやけに高い男だった。

マイケルは瑞樹を狙っているつなぎの青年の武器にめがけて、拳銃を撃つ。マークは、ガソリンスタンドの横に捨ててある廃車の陰に隠れていた、異常など痩せていた男を狙う。なるべく瑞樹を安全に戦わせるように、二人して敵を威嚇していく。

十六の女の子とは思えない格闘技術で、敵を攻めていく瑞樹を見ていると、将来が不安になってくる。あんな女を嫁に貰う男が居るのかと……。

口元を緩めると、つなぎの男の撃ち抜く。鮮血と一緒に持っている自動小銃が、宙に飛ぶ。ナイスショットと、マイケルは心の中で呟いてみる。

早くも瑞樹は、四人目と戦闘を始めていた。マークは援護をフルに貰えるので、初戦のメタボよりも素早く終了していく。思ったより、敵は弱い。

残るは手から血を流している、つなぎの青年だけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7622k/>

雌猫は赤い月に歌う

2010年10月11日03時27分発行